

花石物語

井上ひさし

花石物語 井上ひ

文藝春秋

花石物語

昭和五十五年三月三十日 第一刷
昭和五十五年七月一日 第三刷

定価 八八〇円

著者 井上ひさし

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二三

印刷 大日本印刷

製本 大日製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

花石物語

裝幀
灘本唯人

バカヤローと葉巻の灰を撒き散らしながら首相が野党議員を怒鳴りつけ、首都に街頭テレビや赤電話があらわれて街の風景を変えはじめ、銑鉄の生産量が敗戦の年の五十倍を超え、長年の紙不足が解消されたせいであろうやく厚さを増していた綜合誌で「わが国はアメリカの植民地か従属国か」という論争が戦わされ、若者のひとりがボストンマラソンに参加して大きな優勝杯を手にし、娘のひとりがミスユニバース第三位の小さな王冠を受け、イギリス女王の戴冠式に出席した皇太子が履習単位不足を理由に大学二年後期への進学を教授会から拒否された——などの事柄が年表に記載されている年の、七月中旬の月曜日の午後九時すぎ、夏夫を乗せて、北上山地に穿つた四十個所以上の隧道を輒で宙を裂くような鋭い汽笛を鳴らして次々に通り抜け陸中海岸さして走りつづけて来た四輛編成のカラス列車は、ついに最後の隧道を潜り抜けると、全長九十軒の国鉄線の終点である花石駅へ、あと千五百米と迫った。

カラス列車とはもとより異名である。この線には隧道が多い上に、走っているのは大正期に作

られた建付けの悪い旧式の客車だから、どう防いでも乗客の顔や手や首が煤すすばむ。そこでこの線の全列車がカラスなのだった。

こびりついた煤煙で曇りガラスのように不透明になってしまっている窓を、列車が隧道で道に出入りするたびごとに律儀にかつまた根気よく、持ち上げては閉め、落しては開けあけていた乗客たちも、数分もすればもう終着だというつもりがあるからもはや窓には手を出さず、マスクがわりに鼻と口を覆っていた手拭をほどくと網棚から荷物をおろしはじめた。

夏夫のいる車輛の乗客の大半が、この線のちょうど中間にある遠野駅から乗り込んできたおばさんたちで、紺系統の単衣にもんべ、摩すり切れて、吝嗇家が切った羊羹のように薄い下駄に手拭の姉様被りと、みんな似た恰好をしている。他にも、牛みたいな太い首の上に日灼けした顔の載っているところ、絶えず真桑瓜やトマトを齧かっているところ、それから葱や茄子や枝付豆や胡瓜などを詰めた背負籠をいかにも大事そうに扱うところが共通していた。

不意に列車の走行音が雷鳴のような響きに変った。鉄橋らしい。おばさんたちは背負籠を担いで出口へ移動をはじめ。上野を発はったのが前夜の十一時四十分、あれから二十二時間か、さすがは日本のチベットといわれるだけあって、遠いところにあるんだな。夏夫はぼんやりそんなことを思いながら学生ズボンや開襟シャツの上に落ちた鉛筆の芯の削り滓くずのように細かい煤を払い落す。次に窓際の突起に引っ掛けておいた学帽に手をのばした。ズボンは穿き古して太腿の部分がかてかてと鏡か月夜の湖面の如く輝き、開襟シャツもまた相当に着古した代物で、襟に万遍なく掛けられたミシンの痕は、柔道衣か消防士の着る刺子を連想させ、靴は一応皮だが、円や楕円

の継ぎがいくつも当っており、コッペパンのように凸凹している。網棚にのせてあるズック地のボストンバッグはカナダ人の老修道士からの払下げ品で「ニューヨーク、メーシー特製」というラベルが貼られている。あの世界的に有名なメーシー百貨店の名が冠してあるのだから悪いものではないだろうが、なにしろ買入れたのはその老修道士がまだ壮年の頃だということ、貰ったときにすでに取手がなかった。紐で縛って、その紐を持って歩かなければならない。というわけで夏夫の持物はすべて三流の骨董商が関心を抱きそうなものばかりだが、その学帽だけは新品に近い。鷲を圖案化した徽章などは気味が悪くなるほど眩しく光っている。この四月に、大学の近くの、洋品店を兼ねる学帽制服専売所で買い求めたばかりだから新品同様は当り前だが、夏夫はこの鷲に目が行くたびに、

（もともと成績はよくないし、受験勉強をはじめたのは高校三年の秋からだし、銀杏や稲穂やペンのぶつちがいをつけたいと望むのは高望みだっことは承知している。だけどそれにしても、鷲とはなにごとだろう。これでもう自分の一生は決ったも同じだ。せめてこの鷲が桜だったらなあ）

とまるで深い穴の底にでも落ち込んだように気が滅入ってしまった、それでまだ十回しか頭に戴いたことがなかった。だからいっそう新品然としているのである。

窓外からの光を受けて鷲の徽章は螢の尻のようにべか、ペーかと輝いている。下品な光り方をするなあ、と舌打ちをしたとき、夏夫の脳裡に、一瞬、ダヴィッド院長のお供で渋谷の百貨店に出かけた午後の、あのいやな光景が甦り急に顔がぼてりだした。あのとき夏夫は鷲の学帽を着用

していた。義理があるから仕方がなかったのだ。

夏夫は中学と高校を仙台市ですませている。仙台の東の郊外にチューブから歯磨を絞り出し、そのままそこへ置いたような長い丘がだらんでれんと横たわっており、その丘の東のつつきに、カトリックの、とある修道会の経営する養護施設が建っているが、夏夫はそこから学校へ通わせてもらっていたのだった。高校を卒えたら就職し、施設を出るのが普通だけれども、そこにさらに寄食して、進駐軍キャンプのパン工場で働きながら私立の夜間部で学ぶという特例も認められていた。高校三年の秋、夏夫がこの特例を願ひ出ると、ダヴィッド院長は、

「東京の大学に行きなければ行けますよ」

と思いがけないことをいい出した。

日本の土をはじめて踏んだ外国人の修道士の最初の仕事は日本語の習得である。ところが本部修道院のおかれているこの仙台市には外国人のための日本語学校がない。そこで本会は、日本で最良だという評判の渋谷日本語学院の近くにかねてより売家を物色中だったが、天主様のよろしきお導きを得て、代々木上原にある旧子爵家の邸を買い入れることができた。そこを東京支部修道院とし、このダヴィッド修士が院長をかけ持ちすることになっているが、その書生部屋に入れてあげてもよろしい。ただし千坪の庭の掃き掃除に芝刈、正門と裏門の戸締が仕事です。

「それから……」

院長は最後にこう付け加えた。

「そこから東京大学の教養学部へ歩いて七分ですよ」

その日から夏夫は猛然と勉強をはじめ、高校の担任教師の再三再四にわたる忠告を退け、銀杏と稲穂とペンのぶつちがいの三校を受けた。結果は、銀杏は散り落ち、稲穂は稔らず、ペンの先はぶつ欠けて、と惨憺たるものだった。浪人する勇氣も、また余裕もないのでおろおろしていると、院長がいった。

「驚のマークの大学の入学試験はこれからではないですか。あそこはカトリックの大学です。ということとは東大の次にいい大学です」

仕方なしに受けてみたら合格した。あとで聞いたところでは、夏夫の志望した科の定員は二十名で、その二十名の枠へ殺到した受験生は十六名を数えた、ということだった。驚の学帽を買ってくれたのは入学式についてきてくれた院長である。つまり義理があるとはこのことで、百貨店へカーテン地を見に行くからついてくるようにと院長にいわれて、学帽を被らざるを得なかったのにはこういうわけがあったのだ。

カーテン地売場で院長の傍になるべく目立たぬようにして立っていると、向う側で、上品そうな物腰の婦人と一緒に生地をいじっていた、新しいノートのように清潔で、薄く瘦せた少女が夏夫の学帽を指して叫んだ。

「驚のマークはなんて大学だったかしら」

「しっ、大学ではありませんよ」

上品そうな物腰の婦人が少女の大声をたしなめた。

「たぶん製菓工場の工員さんよ。パパの飲んでらっしゃるお菓にあれと同じマークがついてまし

たよ」

ちがうのだ、製菓会社の鶯は右方を睨んでいるが、この学帽の鶯は左方を……、ここまで思い返したとき、鶯の徽章がひときわ目映ゆく輝きを増した。稻妻のような閃光を發したのである。自分の悪口を咎めるために鶯が怒ったのだ。びっくりして学帽を向いの座席に放り出しそうになった。が、すぐにそんなことがあるわけではないと氣付いた。車窓が非常に明るい。おそらく列車は照明灯の多い駅の構内に入ったのだらう。つまり鶯は車外の光量に忠実に反応しているだけだ。がしかし……、夏夫はまた別の疑問に捕まってしまった。上野駅以北で最も巨きな駅は上野駅だが、昨夜の上野駅もこれほど明るくはなかった。北上山地の突外れ、それも地が海へ落ちるところにある人口五万か六万の駅が上野駅よりも明るいとはとても信じられない。夏夫は窓を落して開けた。蒸釜で熱したような暑い風が躍り込んできた。土の匂いに混ってかすかに磯の香がしていた。そして、五百米ぐらいの隔たった真向いの頂きに太陽の一部分が落ちてゐるのが見えた。五秒に一度の割合で、高さが百米あるかなしかのその山頂に、巨大な火の塊がぶちまけられてゐるのだ。そのたびに数万、数十万の火の粉が金砂子でも撒いたように四方八方に散り、周囲の暗い空へオレンジ色に燦めきながら飛んで行く。カラス列車は転轍機の多いところに差しかかり、間もなくホームへ滑り込むはずだが、線路と向いの山との間は、黒い大屋根で埋めつくされてゐる。いずれも四、五階のビルのふたつやみつ、たやすく隠してしまいそうなほど大きい。これらの大屋根を太いパイプが右へ左へ、そして上へ下へと繋いでゐる。しかもパイプは大屋根と大屋根とを連結してゐるばかりではない、ざっと数えただけでも二十本を超える大煙突群や、直径

三十米は充分にあり、そんな数基の円型タンクや、大小無数の鉄槽の間を自由自在縦横無尽に走りまわっていた。ここまでをひくくめて、夏夫が二十二時間かかって移動してきた距離をわずか三十分で走破する途方もなく巨大なロボットが、真向いの火の山と駅舎や線路との間に仰向けに臥しており、その際、彼は表面の鋼鉄板を外して内臓機械を露呈させている、とでもいえばよいだろうか。列車がホームに着いて走行音が鎮まった。かわって地響きにしては甲高い、コーンという音がいくつも波のように押し寄せてきた。山頂はまだ灼けている。

「申す、終点だべんたら」

背負籠のおばさんのひとりが夏夫に声をかけた。

「学生ちゃんも降いねば、なもす？」

夏夫は数週前からことばの病にかかっている、まとまった意味のことを発語するのはなかなかむずかしい、やたらにうーうー唸っているばかりだった。もともとたと言語障害にかかっていたのかとしても、この壮大な夜景の不意打にあってはまとまったことをいうのはむずかしかっただろうが。

「製鉄所ば始めて見た人ア誰でもあの火の粉に魂消る。あれア鉾澤ば捨てて居んだえ。鉄の滓なんでがます。あの山は自然の山では無えんだや。底の底まで鉾澤なんだずもん。……なんたらまんつ、この学生ちゃんの不愛想なごど。人が折角、教えてやってるつうのに。呆れた、呆れた……」

おばさんは背負籠を揺りあげて出口に向かってべたらべたらと薄い下駄を鳴らして去った。学帽

を押し込んだポストンバッグを左脇に抱え、夏夫は最後に改札口を出た。駅前広場の向うに左右へのびる広い道路があった。道路の向うはすぐに高い壁になっている。壁は道路と平行に左と右へ蜿々と続いているようだった。

（万里の長城みたいな壁だな。そして壁の向う側に、おばさんのいつていた製鉄所ってやつがひろがっているんだ、たぶんあの火の山のふもとまで）

心のなかで呟くうちに夏夫の顔はどんどん上を向いて行き、これ以上は首がいうことをきかない、首が折れるか、それとも頭が腕げ落ちるかという、ぎりぎりのところでとまった。夏夫は、壁に、五十米ほどの間をおいて並ぶ五本の大煙突を根元から天辺へと眺め上げていたのである。煙突の高さはほとんど百米に届くと思われる。夏夫は天を支えているかのようなその高さにもおどろいたが、同時に煙突の天辺から夜空に向って吐きだされる煙の色にも胆を奪われた。壁の向う側に林立する照明灯によって下から照し出された五条の煙は右から左へ、赤、紫、白、黄、オレンジと、染めあがったばかりの薄物でも見るような、冴え返った色をしていたからだ。跡切れずに繰り出される煙は口のあたりでほんのしばらくうろろと迷ったあと、不意に矢のごとき早さで夜空の底へとかけのぼり、やがて紛れて消えてしまう。眺めているうちに煙の身軽さがこっちへも乗り移ってきて、自分の身体が宙へ浮きあがるよううきうきした気分になってきた。が、間もなく首がみしみしい出したので、夏夫は顔の向きを元へ戻した。うきうきした気分はいいのだが、首が折れてしまつては困るのだ。顔を元へ戻した拍子に夏夫は、この五本の煙突について母親の葉書にもなにか記してあつたことを思い出した。ズボンの尻ポケットから葉書を抜き出

しながら、駅舎のあかりへ数歩逆戻りした。駅と製鉄所からこぼれてくるあかりで、駅前広場は新聞でも読めそうなほど明るいのだが、今はこの葉書を道しるべとして読みとらなくてはならない。それには灯の下で一字一字正確に文面を辿る必要がある。

病氣になったとのことだが、なんの病氣なのですか。病名が書いてないので、これでは心配しようにも心配のしようがないではないか、と心配しています。夏休みは気晴しのつもりで花石へ来たかどうか。とはいっても、わたしのいるところは、港の岸壁がすぐの朝日町という、花石で一番にぎやかな町の岩館洋品屋二階の四畳半です。狭くてやかましくて気晴しどころじゃなくなるかもしれないが。

大正のころに「花石名物なんにもねえ、鴉に蔦に屋根の石」という唄があったそうだが、いまの名物は製鉄所の五本の大煙突です。いよいよお店を目抜き通りに出すことにしました。なお、早く病名を知らせよ。

母より

住所は「岩手県花石市朝日町一 岩館洋品屋方」で、これはこの正月に母親が青森県の八戸市から花石市へ引っ越してきて以来のものだった。変ってはいない。「港の岸壁がすぐの朝日町」というくだりを何度も黙読して心に刻みつけると、夏夫は製鉄所の巨大な壁のすぐ前の道路を左へ踏み出した。自分の乗った列車は北上山地を抜けて右方からこの花石市へ入ってきた。が、そ

の間、山ばかり、海のウの字も見かけなかった。だから海があるとすれば左方にちがいないと見当をつけたのだ。

道路は左へ左へと弓なりに曲って行き、ほどなく傾斜は急だが長さは十米もない坂に着いた。駅からここまで人家は一軒もない。鉄道官舎と思われる同じつくりの平屋が並んでいるだけだった。

（やっぱり田舎だなあ）

数カ月前までは自分もその東北の住人だったのに、また今は都落ち同然のていたらくで母親の住む東北の小都市までようやくと辿りついたところのくせに、何をいつてるのだ、と夏夫は自分で自分を叱りつけた。だが心のどこかではほんと安堵の息をついている。東京帰りの若者を迎える東北の田舎町は、すべからくひなびて、さびれて、さびしいものでなくてはならない。その点で、駅前にまじな見世屋が一軒もないこの花石市はまことに感心なものだ。

（驚の帽子を被ろうか。驚だろが、驚だろが、鴉だろがなんだろが、角帽は角帽だものな。名物が鉢洋場と大煙突しかない田舎町のことだ、大学はもちろん短大だってないにちがいない。驚でも結構通用するかもしれないぞ）

夏夫は左脇に抱えたポストンバッグから学帽を引っ張り出した。が、あわてて学帽を元のように押し込んでしまった。坂をのぼりつめたところに百米近い大きな橋があり、その橋に繋って街が向うへのびているが、それが田舎町にあるまじき賑わいぶりを呈しているのだ。各商店は近隣と共同でアーケードの庇を長く張り出し、その下を人の潮がゆつくりと寄せたり返したりしてい

た。アーケードの庇の切れかかる、歩道と車道の境目には、屋台や夜店が数珠つながりに並び、おどろいたことに外国人が金魚をすくったり、氷水の立ち喰いをしたりしている。外国人は白の丸首シャツ組と背広組の、二種類に分かれるようだった。

夏夫はダヴィッド院長のお供で、夜の、銀座と渋谷と横浜へ一度ずつ出かけている。そのときの記憶と重ね合せてみると、この花石の商店街の人工照明の明るさは銀座に、人出は渋谷に、そして外国人の数は横浜に、充分に対抗できると思われた。ただちがうのは、右手に続く製鉄所の高壁と大屋根で、それらは目の前の商店街と平行に百五、六十米の距離を保ちながら、あいかわらず彼方へ黒々とのびていた。

遠野を過ぎてからは人家の灯を見るのも稀で、山ばかりだったのに、どうしてその山の奥に、降って湧いたような、このように咲き賑わう都市があるのだろう。夏夫にはさっぱりわからない。わかったのは、左方にも山が迫っていて、市街地の幅は五百米もない、ということぐらいである。真中に繁昌する大通りが一本通り、あとは枝のように小路が左右へ突き出している。夏夫は東に向って歩きながら、高校の人文地理の時間に習った「ヤン輝町」ということばを思い出していた。

困ったことに、大通りはどこも賑やかなので、母親の葉書の「港の岸壁がすぐの朝日町という、花石で一番にぎやかな町」という文句があてにならなくなった。煙草屋の前へさしかかるたびに「朝日町はどこですか」と聞こうとして立ちどまる。店の人が「ナンデカ？」とこつちを向くと、頭にかつと血がのぼり、耳が紅を塗ったように赤くなり、う、うう、と唸って引きさがる。そして「ナンタラマンツ……」と店の人の眩くのを背中に聞きながらまた東へ、海があると思われる

方角へ歩き出す。これを繰り返しているうちにやがてアーケードは尽きて、人通りが疎らになってきた。潮の香がしきりとしているのに、海はまだその姿をあらわそうとしていない。

他人と対話ができないという、夏夫のこの病いは、四月のある土曜日の午後にはじまっている。そのとき夏夫はダヴィッド院長の贈物である驚の学帽を被って、渋谷駅前交差点で信号が青に変わるのを待っていた。信号灯が青になったので何気なく左右を見回し歩き出したが、夏夫は周囲にいろのが銀杏のバッジの集団だったので、思わず「あつ」と叫んでしまった。むろん銀杏バッジがひとりで、あるいはふたりでいるところなら見たことがあった。夏期休暇や年末年始休暇などに出来のよくない生徒を集めて補習授業を施すのが夏夫たちの高校のきまりの行事だったが、そのときに休暇で帰省中の先輩がよく教室に姿を見せた。学校側の思惑は、優秀な先輩の体験談で劣等生を発奮させようというところにあつたらしいが、これはむしろ逆効果だった。銀杏バッジの先輩たちは、そのバッジの値打をいっそう強調するために「おれは三年間でコンサイス英和を五冊は喰ったぞ。むろんただ喰ったのではない、暗記してから喰ったのだ」だの、「そうだな、三年間で布団に寝たのは正月二日の夜だけじゃないかな。正月二日の晩に布団に寝たのは、銀杏のバッジをつけている自分の姿を初夢に見るためさ。そうでもなければだれが布団になぞ寝るものか」だのと、自分の高校時代を神話化してしまうのが常だったからである。なかには「なあに、おれの場合は僥倖がすべてでね、みんなの参考になるようなことはいえないな。試験の三日前に教科書や参考書をばらばらめくっていたら、なんと全問題がそのときめくったなかから出たのだよ」と語ったお道化^{どけ}た先輩もいた。そこで夏夫たちは、銀杏のバッジを手に入れるには「よほど